

企画展「佐川晃司展」

開催要項（案）

1. 名称

展覧会名：佐川晃司展

副題：絵画、居場所のこと

※英題やキャッチコピーは、現時点では検討中

2. 趣旨

佐川晃司（1955 年福井県福井市生まれ）は、半世紀近くにわたり、絵画という形式を通して、世界との関わり方を問い続けてきた画家である。高校時代の具象的な習作や受験期のデッサンを経て、1970 年代後半に東京藝術大学に進学した佐川は、榎倉康二や同世代の作家たちとの交流のなかで、もの派以後の美術状況に触れながら、自らにとって「絵画でなければならない理由」を模索していった。同時に、フォーマリズムや現象学への関心、日本の伝統的な絵画空間への再考を通じて、絵画を単なる表現手段ではなく、見ること、身体、空間、そして世界の立ち現れを考えるための場として捉えるようになる。

藝大卒業後、佐川は京都精華大学で長く教鞭をとり、多くの後進を育てる一方、1994 年からは滋賀県大津市伊香立の里山にアトリエを構え、同地を制作の重要な拠点としてきた。里山の起伏、樹木の量感、道や土地の広がり、さらに琵琶湖の水面やその遠さと身体的に対峙する経験は、佐川の絵画における風景、空間、距離、見ることの問題に深く反映されている。

本展「佐川晃司展 絵画、居場所のこと」は、佐川の高校生時代の作品から近作までを通覧する回顧展として、その画業を 6 章構成で時系列に検証するものである。初期の具象絵画やもの派の影響を受けた試み、フォーマリズムの影響による色面の絵画、「半面性の樹塊」の前期・中期・後期、そして「公園の入口」「道と土地」「遠さを含む形」など近年の作品へと至る流れを、油彩による大作タブローを中心に、木炭ドローイングや関連資料を交えながら紹介する。出品点数は約 70 点を予定している。

とりわけ本展では、1980 年代末に始まり、今日まで展開されてきた「半面性の樹塊」シリーズを佐川の画業の中心に据える。同シリーズは、菱形を基本的な構成単位とする抽象絵画でありながら、樹木、風景、土地、距離、身体といった問題を画面の内部に呼び込み、形式と経験、構造と感情、画面と世界との関係を長期にわたり問い続けるものであった。佐川の絵画は、里山という場における知覚の体験を、ある種の抽象化を通じて画面へと移し替えるものであると同時に、その画面を、単に見る対象としてではなく、見る者の身体の中に新たな体験の場を生起させる契機として捉え直すものでもある。

副題に掲げる「絵画、居場所のこと」には、絵画が描かれた場所、絵画の中に現れる場所、そして鑑賞者が絵画の前で一時的に身を置く場所という、複数の「居場所」への問いを込めている。変化の激しい時代にあって、佐川は急激な更新ではなく、ひとつのシリーズに長く向き合う持続的な変容の中で絵画を深めてきた。本展は、その歩みを通して、静かでありながら確かな強度をもつ絵画の場に出会う機会とするものである。

3. 会期

2027年1月15日（金）～3月22日（月・祝） 58日間（休館日除く）

休館日：毎週月曜日（ただし、3月22日は開館）

4. 会場

滋賀県立美術館 展示室3

5. 観覧料

観覧料：一般 1200 円（1000 円）

高大生 800 円（600 円）

小中生 600 円（450 円）

※（ ）内は 20 名以上の団体料金

※身体障害者手帳、精神障害者保健福祉手帳、療育手帳等をお持ちの方とその介助の方は無料

※同時開催中の常設展も観覧可能

※未就学児は無料

6. 主催

滋賀県立美術館、京都新聞

7. 展覧会の構成

高校生時代の作品から近作までを通覧する回顧展として、その画業を 6 章構成で時系列に検証・展示する。

油彩による大作タブローを中心に、木炭ドローイングや関連資料を交えながら紹介する。

（現在、細部調整中）

8. 関連事業

（1）講演会

（2）作家とゲストによるスペシャルギャラリートーク

(3) 担当学芸員によるギャラリーツアー

(4) ワークショップ

など、検討中

9. 担当

監修：保坂健二郎（滋賀県立美術館ディレクター・館長）

担当：真山陽理子（滋賀県立美術館 学芸員）

〒520-2122 滋賀県大津市瀬田南大萱町 1740-1

TEL 077-543-2113 FAX 077-543-2170